

## ～新城島とジュゴン～

教育学部 生涯教育課程 島嶼文化教育コース二年次 玉城 寛奈

インターネットで新城島を検索すると、よく「ジュゴン」というキーワードがでてくる。気になり調べてみると、かつて新城島は琉球王府から海条件を与えられ人頭税の代わりにジュゴンを納めていたということがわかった。また、島にはジュゴンをまつた御獄もあるという。なぜこの小さな島にこのような特別な権利が与えられたのか。琉球王府はなぜジュゴンを捕らせたのか。島にあるジュゴンの御獄は島の人々にとってどのような存在なのか……。このようなことを中心に新城島とジュゴンの関係を見ていきたい。

### 1. 人頭税とは？

ここで簡単に人頭税とはどのようなものか……。ということについてみてみたい。人頭税とは1637年から1903年までの266年間、王位11代という驚くべき永い期間、宮古・八重山の両先島を対象とした税制度である。宮古・八重山の人口を調査し、生産石高にわりあてて徴収した貢祖を、人頭に割り当てて徴収したことが人頭税の始まりである。15歳から50歳までの男女を年齢により上、中、下、下下の四段階に分け、それぞれの階級ごとに税率が変わった。しかし、このやり方は人口の増減に伴って納額も不定だったので、1959年より、人口の増減に関係なく毎年の納額を一定するという定額人頭税という類のない、驚くべき方法に改正した。さらに驚くべきことは、1637年の正式人頭税に先立つこと9年前から既に過渡的にこのような措置がとられていたことが伝えられていることだ。史家は「八重山の近世史は、ほとんど人頭税史と言っても過言ではない」と極限しているほど八重山の人頭税の歴史は惨酷で期間も長いものだった。あまりの過酷さに生きる苦しみに堪えかねて自殺者が続出し、墜胎が公然として行われ、生まれた赤子は圧殺又は埋殺資し、或いは妻子を売るといったこともあったという。\*1参照

なぜ全琉球住民ではなく宮古・八重山の住民だけを対象にこのような税制度が行われたのだろうか。その答えとして、人頭税は単なる税収だけを目的としたものではなく、首里王府の、八重山の反旗を未然に防ぐという、高度な政治的意図が具体的に実施されたものであるという見方がある。人頭税は一方に於いては王府の財政を助け、そして他の一方に於いては反旗を未然に防ぐという、琉球王府にとっては正に一石二鳥の効果をもつ政策だったのだ。

### 2、新城島の人頭税

人頭税が始まる前、首里から役人が来て島の調査をしたという。その役人が地形的に

資源が恵まれてなく、アワ、芋、豆しかとれないので穀物（米）を納めるのは無理と報告したのでジュゴンを捕らしたという話がある。（西大舩 高壺さんの話）しかし、これだけでは他の島々の条件（環境）とたいした変わりはなく、「何故新城島だけジュゴンの捕獲が許されたのか」ということに関してはハッキリしない。これに対して、新城島には稲作がないかわりに漁の技術があった。新城島の人には海にたけている民族だったという言い伝えがある。よって、新城島だけジュゴンの捕獲を許し、首里王府に納めさせたと考えられている。

新城島から王府に納めたものとして、ジュゴン、布、亀の甲羅があげられる。ジュゴンとはジュゴンの肉を指し、これを干して納めたと言い伝えられている。よって、島の人にとってジュゴンの肉は食べることでできない貴重なものだったということが考えられる。琉球王府ではこのジュゴンを「安産の媚薬」「不老長寿の霊薬」とし\*2、国王の食前に欠かせないものとして食べられていたという。また、幕府や中国にもジュゴンを献上していたという説がある。ジュゴンに関してはジュゴンの皮だけを納めたという話もあったが、文献上や島の人の先輩から言い伝わっている話のなかではそのような事実はなく、皮だけということは考えにくい。

次に布だが、これは芭蕉と麻を指す。亀の甲羅は女性の装飾品（かんざし等）に使われたという。島には米を採って納めていたという言い伝えもある。しかし、「稲なし。稲米は所乃島より貿易す」\*3という記述もあり、この二つは時代が違っていると考えられる。島出身の島中信良さんは父親から島も米を納めていたことを聞いており、米が納められたのは人頭税の後半ではないかとみている。

ジュゴンの漁の様子を歌ったものとして「ザンとる歌」（「まーじゃみやらび」）がある。「ザン」とはジュゴンのことを指す。この歌は島の「セツ祭」のときに参加者全員で円になり歌われる。「まーじゃみやらび」の「まーじゃ」とは地名で、石垣にある村のことを指し、「みやらび」はその娘達を指す。新城島でジュゴンが捕れなくなった村の男達は出稼ぎのように他の島に行って漁をした。当時ジュゴンが最も捕れた地域は石垣の白保、大浜、登野城、白川の四つの村で四字（しか）とよばれていた。

この歌で指す「みやらび（娘）」には二つの説がある。一つは、漁の期間だけの現地妻のことではないか・・・というものである。もう一つは、現地に行って網の材料（ゆなやアダン）を調達してくれる娘達であるという説である。歌の歌詞を見てみると、後者のほうではないかと思われるが、石垣に移動したあとに材料を調達しそれを乾燥させ、それから網をなるとなると多くの日数が必要となるので前者のほうではないかとみている島民もいる。また、歌の3番にでてくる「しるびやま」というのは新城島に存在するということから前者の説が考えられている。

#### ☞まーじゃみやらび\*5

1、まーじゃ みやらびぬよ

真謝村（白保）の

メーショレノ カナシ (以下\*に省略)

みやらび (娘) 達がよ

2、せか (四字) みやらびぬよ

\*

四ヶ村 (石垣) の

みやらび達がよ

3、しるびやま まりやらきよ

\*

磯山 (海岸沿いの雑  
木林) を廻り歩いて

4、あだにやまば まりやらきよ

\*

アダンの林を

廻り歩いて

5、ゆなかじ弁ばゆ ばぎ弁どーしよ

\*

オーハマポーの表皮を  
はぎとって

6、あだなし弁ばゆ き弁り弁どーしよ

\*

アダンの木根を切り取  
って

7、みかぶし弁ゆ さらしょーりよ

\*

三日間も干し晒して

8、ゆかぶし弁ゆ さらしょーりよ

\*

四日間も干し晒して

9、さぎ弁なさぎ弁ゆ みりばどうよ

\*

裂きに裂いて  
(細かく裂いて) みると

10、なぎ弁ななぎ弁ゆ みりばよ

11、うふみあんば くぬみょーりよ

\*

縄をなってみると  
大きい目の網を編んで

12、やつみあんば くぬみょーりよ

\*

八つ目の網を編んで

13、まいどうまるに うるしょーりよ

\*

前泊の浜に降ろして

- 14、いしょどうまるに うるしょーりよ  
\*  
漁港に降ろして
- 15、いしょふににゆ ぬゆしょーりよ  
\*  
漁する船に乗せて
- 16、ならふににゆ ぬゆしょーりよ  
\*  
自分の船に乗せて
- 17、くぎなくぎゆ みりぼどうよ  
\*  
漕ぎに漕いで見たら
- 18、うしなうしゆ みりぼどうよ  
\*  
押しに押して(対語)みたら
- 19、まーじゃふちちゆ まーりやらきよ  
\*  
真謝口を廻って歩いて
- 20、せかふちちゆ まーりやらきよ  
\*  
四ヶ口(さくら口)を廻って  
来て
- 21、たていなたていよ みりぼどうよ  
\*  
縄を張りたてて見たら
- 22、すゆびちさし みりぼどうよ  
\*  
潮を干かし見たら
- 23、ざんぬみゆとゆ とうるんていよ  
\*  
ザンの夫婦を捕獲しようと
- 24、かみぬみゆとゆ とうるんていよ  
\*  
海亀の夫婦を捕まえようと
- 25、いしょにによ ぬゆしょーりよ  
\*  
漁船に乗せて

26、ならふにによ ぬゆしょーりよ *	自分の船に乗せて
27、くぎ弁なくぎ弁よ みりぼどよ *	漕ぎに漕いで見たら
28、うしなうしょ みりぼどうよ *	押しにおして見たら
29、いしょどうまるに うるしょりよ *	漁港に降ろして
30、まいどうまるに うるしょりよ *	前泊に降ろして
31、しつきんとるぬ なち弁きしょ *	しらみ取りを口実にして
32、きざんとるぬ なち弁きしょ *	子じらみ取りを口実にして
33、ならむのゆ みるんてよ *	自分のものに似たものを 見ようとして

\* (メーショレノ カナシ) は繰り返し。「カナシ」にはもともと「味深い」「親しみ深い」「可愛い」等の意味があるが、ここでの「メーショレノ カナシ」にはたいした意味はなく、結び(体裁を整えるもの)である。

ジュゴン(マンボウ)は戦後の食糧難でダイナマイトによって乱獲され、現在、八重山に生息しているジュゴンはいないとの報告がある。(1999年8月、ジュゴン研究会とジュゴンネットワーク沖縄の共同調査によって判明)

### 3、ジュゴンに関する御獄

ジュゴンに関する御獄は上地島、下地島の各島に一つずつある。沖縄タイムスの記事で『ジュゴンの霊を慰め、漁の安全を祈願するため、人々はジュゴンの骨を集めた「イル御獄」をつくり、今も大切に祀っている』\*4とあるが、上地、下地とも「イル御獄」

はあるものの、島民の話しではどちらもジュゴンをまつているという事実はないという。当初、文献からジュゴンをまつている御獄はアールウガン、イルウガン、ザンヌオンの3つと考えていたが、アールウガンとザンヌオンは同じ御獄を指していることがわかり、また、イル御獄は違うとみえて、最終的にはアールウガン（上地島）、七門獄（下地島）の二つということがわかった。

この二つのウガンは別名として「イショワン」または「イショウガン」と呼ばれており、「イショ」という名がつく共通点がある。「イショ」がつくウタキはこの二つだけであり、島では海を指す。

### 上地島・・・東御獄（アールウガン）

別名・ザンヌオン、ムトゥウザン、イショウガン

航海安全祈願、豊漁祈願も行なわれていた。近くに井戸があり、この井戸は昔の生活の中心だった。その中でも「ニスケー」と呼ばれる井戸はアールウガンと結びつきが強く、島の人の話では「二つセット」と言われていたらしい。

ニス（北）ケー・・・アールウガンの茶わきに使ったり、お花をいけるための水として使われた。これより、この井戸はアールウガンと一つだったと言われている。その他生活用水としても使われた。

カン（神様）ケー・・・島のニガイをする時は必ずこの井戸から水をとった。この井戸の水は島の人にとってとても大切なもので、セツ祭を含めた二日間は他の島の人にこの水をとらせてはいけないというきまりがあった。もしもとられたら、その年、この島は不作になるとされた。昔は上地島と下地島はなにかと対立しており、お互いに相手の島の水をとり、不作にさせようとしていた・・・という話もある。この井戸の水を守るのは子供の仕事であり、最近まで行われていた。夜になると恐いので、子供たちは歌を歌ったりしながら夜を過ごしていたという。何故子供の仕事だったのかは島の人にもわからないが、大人でなく子供というところが面白いと思った。

ウンブ（大きい）ケー・・・6つある井戸のなかで一番大きな井戸だった。カンケーとこの井戸が一番水が豊富だったといわれている。

ツプ（壺）ケー・・・壺のように底が小さくすぼんでいたことからこの名前がつけられた。6つの井戸の中心に位置する。一番水が甘かった。

ツル（ツルゲ） ケー・・・ 6つの井戸のうち、この井戸だけツルゲで水をくんでいたことからこの名前がつけられた。ちなみに他の井戸は全部「おりかわ」だったらしい。

フタゴ（フタゴ） ケー・・・ 一つの穴から二つの水壺（水たまり）につながっていたことからこの名前がつけられた。6つの井戸の一番奥に位置する。

#### 下地島・・・七門御獄（ナナザウウガン）

下地島の海岸に近いところに位置する。「七門」とは七つの水路の事を指す。お宮にむかって放射線状に七つの水路がのびており、ここから魚がはいってきたという。何故七つか・・・ということは島の長老もわからないと言っていたが、何か意味のあるような感じがする。これは個人的に調べていきたいと思っているが、次回、この調査をする人にもぜひ調べて答えを探してほしいと思う。

海では魚がのぼるところ、さがるところが決まっており、この七つの水路はその原理をうまく利用したと考えられる。大漁祈願も行われており、別名として「イシヨワン」と呼ばれていたことも納得がいく。

#### ☆さいごに

今回の調査において、島の公民館長でいらっしゃる島中信良さんをはじめ、副館長の安里さん、新城島の大統領といわれている西大舛高壺さん、その他大勢の皆さんに協力してもらい、快く話しを聞かせてくれたことにとても感謝している。新城島はとても小さな島だが、島にたいする島民のみなさんのあつい気持ちはとても強く、先輩から後輩への島の文化やその他多くの島にまつわる言い伝えもきちんと伝承している様子がうかがえた。この人と人の結びつき、島の文化が島を支えている大きな源になっているのを強く感じた。これはこれからも大切なものとして残して(伝承して)いくべきである。このことは新城島だけでなく、竹富町、沖縄、日本の宝になるだろう。

#### 参考文献

- \* 1 「八重山の御獄」 著・牧野 清
- \* 2 沖縄タイムス 1999, 12, 18 「特集 島を往く・船人くらし」  
1999, 11, 17 投稿[茶のみ話] あさとゆう (6)

3)

- \* 3 朝鮮王朝実録 成宗10年(1479)6月条
- \* 4 沖縄タイムス 1999, 12, 18「特集 島を往く・船人暮らし」
- \* 5 「新城島の古謡と祭祀」 著・西大舛 高尙